大学生の死に関する経験による人格的発達 †

― 共感性・死に対する態度の視点から ―

前原　佳奈*・橘川　真彦**
宇都宮海星女子学院*
宇都宮大学教育学部**

普段あまり「生」や「死」について触れる機会の少ない者でも死に関する経験によってポジティブな変化が起こるのかを明らかにするため，大学生 102 名を対象に質問紙調査を行った。その結果，死にまつわる情報で感動した経験のある人の方が，経験のない人に比べ人格的に発達していることが示された。そこで，死にまつわる情報で感動した経験のある 86 名を対象とし，大学生における死に関する経験による人格的発達の具体的構造と，死に関する経験による人格的発達と共感性および死に対する態度との関連について検討した。死に関する経験による人格的発達は，「自己感覚の拡大」「生と死の意味」「死への恐怖の克服」の３下位尺度から構成されていた。また，死に関する経験による人格的発達と共感性及び死に対する態度との関連が認められた。共感性が高い人や，死に対して恐怖を感じている人ほど，死に関する経験後にポジティブな変化をしていることが示された。

キーワード:　死に関する経験，人格的発達，共感性，死に対する態度，死

１．問題と目的

人は生きている限り，常に「死」と隣り合わせにある。身近な人の死に遭うこともあるだろう。しかし生きている我々はその「死」を乗越えていかねばならない。「死」を乗り越えたとき，私たちは一体なにを得，どのように変化するのだろうか。

これまでの死別研究は，悲観やうつ病，不安障害，心身症など，「死別経験後の遺族の変化を身体的・精神的不適応等，ネガティブなものとして捉え，そこからの立ち直りへの援助に焦点をあてたもの」（渡邉・岡本，2005）がほとんどであった。しかし近年，ストレス関連成長（stress related growth：SRG）や，PTSD（Post-Traumatic Stress Disorder：心的外傷後ストレス障害）研究の，そのトラウマとなった出来事の意味（meaning）に関する心理的プロセスの見地から，死別経験が及ぼす影響のポジティブな側面が検討されつつある。

日本において死別経験後のポジティブな変化に注目した研究として，以下の３編を挙げることができる。東村・坂口・柏木・恒藤（2001）は，日本ではストレス関連成長の視点からの調査が殆ど行われていないことを指摘し，ガンのために近親者を亡くした 206 家族を対象に質問紙調査を実施した。そして，死別経験による遺族の人間的成長を自由記述の内容より検討し，①ライフスタイルの変化，②死への態度の変化，③人間関係の再認識，④生への感謝，⑤自己の成長，⑥人生哲学の獲得，⑦宗教観の変化の７つに分類している。また，坂口（2002）は PTSD の見地から有益性発見（困難な状況の中に個人の人生にとっての有益性や価値を見出すこと）に焦点をあて，東村ら（2001）の研究を基に有益性発見尺度を作成した。そして，①いのちの再確認，②自己の成長，③人間関係の再認識の３因子を報告している。渡邉・岡本（2005）は，上記２つの研究について，「死別後のポジティブな変化を具体的に明らかにしたという点で高く評価できる」としながらも，「両者の研究はいずれもホスピスの患者の遺族を対象にしており，一般病棟よりも家族（遺族）へのケアが考慮されたものであることが予想できる点，故人の死因がガンに限定されている点において，限定的な

† Kana MAEHARA* and Masahiko KIKKAWA**：Personality Development After Experience about the Death in University Students. －From the Viewpoint of Empathy and Attitude toward Death－
* Utsunomiya Kaisei Junior & Senior Girls' High School
** Faculty of Education, Utsunomiya University

死別体験である」とし，死亡場所，死因を特定せずに，死別経験による人格的発達（定義：身近な他者との死別を契機として，自己の洞察を深めるという心理的プロセスにおけるポジティブな変化）について考察している。その中で，死別経験による人格的発達尺度を作成し，①自己感覚の拡大，②死への恐怖の克服，③死への関心・死の意味の３因子を報告している。

しかし，渡邉・岡本（2005）の研究は，終末期を考える市民の会，生と死を考える会の会員など，「生」や「死」について考える機会が多いと思われるものを調査対象者としており，「結果はかなり偏りのあるもの」（渡邉・岡本，2005）である。また，調査対象者の平均年齢も62.92歳と非常に高い。そこで本研究では大学生を対象とし，普段あまり「生」や「死」について触れる機会の少ない者でも，死別経験によってポジティブな変化が起こるのかについて検討することを第１の目的とする。また，「直接的に他者の死を経験することのみが死生観を決定するというわけではなく，間接的な死の経験を通してであっても死生観は同様に形成されうる」（丹下，1995）こと，さらに，前原（2006）の研究においても，メディアによる「生」や「死」の情報が死に対する態度に影響を与えることが示されたことなどから，本研究では死別経験に限定せず，死にまつわる情報を得ることによってポジティブな変化が起こるのかについても同じく検討する。

死に関する経験によってポジティブな変化が起こるとすれば，それは，その「死」から何かを学んだ，ということである。しかし，「私の死は経験されえないのだから，普通に経験される死は，私の死ではなくて，第二人称でよびあう家族や友人の死であり，それ以外の，第三人称でよばれる者の死である」（竹田，1997）とあるように，我々は「死」を体験することは決してできないため，死に逝く人，またはその死を看取る人に自分自身を重ね合わせ，共感することでその「死」を吸収していくと考えられる。川守田・風岡（2002）の研究においても，共感性が高いと人生に対して死が持つ意味を考えようとする，と考察されており，共感性が死に関する経験後のポジティブな変化に影響を与えている可能性が考えられる。そこで，本研究では，死に関する経験による人格的発達と共感性との関連を検討することを第２の目的とする。また，死に対する態度の違いによって死に関する経験の受け止め方が異なり，その違いがその後の変化にも影響を与えることが予想される。そこで，死に関する経験による人格的発達と死に対する態度との関連も同様に検討する。

２．方法

（１）調査対象者

調査対象者は宇都宮大学の学生など108名で，著者や著者の知人の依頼に応じて回答した。全回答者108名のうち，年齢が30歳以上の回答者６名は分析の対象外とした。最終的に，102名が有効回答者となった。性別の内訳は男性46名（45.1%），女性55名（53.9%），不明１名（1.0%）で，平均年齢は22.56歳（SD = 2.97）である。なお，欠損値のあるデータは分析ごとに除外した。

（２）調査時期及び調査手続き

2007年７月下旬から９月中旬に調査を実施した。質問紙を個別に配布し，その場，もしくは後日回収した。回答はいずれも無記名で行われた。

（３）調査内容

①フェイスシート

年齢，性別の記入を求めた。

②死別経験の有無と親密度

身近な人（家族，友人など）との死別の経験の有無を尋ねた。また，その身近な人とどの程度親しかったかを，「全く親しくなかった」「あまり親しくなかった」「どちらでもない」「少し親しかった」「非常に親しかった」から選択するよう求めた。

③死にまつわる情報で感動した経験

死にまつわる情報（テレビ，映画，小説，漫画など）で感動した経験の有無を尋ねた。

④死別経験による人格的発達尺度

死に関する経験によるポジティブな変化を測定するため，渡邉・岡本（2005）の死別経験による人格的発達尺度を，内容がわかりにくい部分を一部修正し使用した。この尺度は，「自己感覚の拡大」「死への恐怖の克服」「死への関心・死の意味」の３因子32項目からなる。「自己感覚の拡大」は，自己を受容した上で他者や社会へ視点を移すという範囲の拡大を表す尺度で，“私は、プラス思考で物事を考えられるようになった”など20項目からなる。高得点ほど自己感覚が拡大したと感じていることを表す（得点可能範囲：20 - 100）。「死への恐怖の克服」は，死に対する恐怖の減少を表す尺度で，“私

は，死について考えることを避けるようになった（逆転項目）”など５項目からなる。高得点ほど死に対する恐怖を克服していることを表す（得点可能範囲：5 - 25）。「死への関心・死の意味」は，死について考えたり，死が人生に肯定的な作用を持つとする認識の尺度で，“私は，自分の死についてよく考えるようになった”など７項目からなる。高得点ほど死や，死の意味について考えることを表す（得点可能範囲：7－35）。回答については，「全くそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらともいえない」「少しそう思う」「非常にそう思う」の５段階評定で回答を求めた。

⑤青年期用多次元的共感性尺度

共感性を測定するため，登張（2003）の青年期用多次元的共感性尺度を使用した。この尺度は「共感的関心」「ファンタジー」「個人的苦痛」「気持ちの想像」の４因子 30 項目からなる。「共感的関心」は，困難な状況にある人や苦痛を感じている人をみて，自分も同じように感じたり，相手の苦痛を軽減したいと思う，といった内容の尺度で，“困っている人がいたら助けたい”など 13 項目からなる。高得点ほど他者の状況や感情体験に対し自分も同じように感じ，同情などの他者志向の気持ちを持つことを表す（得点可能範囲：13 - 65）。「ファンタジー」は，小説や映画の登場人物の気持ちになることを表す尺度で，“小説を読むとき、登場人物の気持ちになりきってしまう”など６項目からなる。高得点ほど架空の人物に感情移入することを表す（得点可能範囲：6 - 30）。「個人的苦痛」は，他者の苦痛に対し自分が不安になってしまい，状況に対応した行動をとることができない，といった内容の尺度で，“急に何かが起こると，どうしていいかわからなくなる”など６項目からなる。高得点ほど，他者の苦痛に対し苦痛や不安など自分中心の感情的反応をすることを表す（得点可能範囲：6 - 30）。「気持ちの想像」は，他者の視点や立場に立って気持ちを想像することを表す尺度で，“誰かを批判するより前に，自分がその立場だったらどう思うか想像する”など５項目からなる。高得点ほど他者の気持ちや状況を想像することを表す（得点可能範囲：5 - 25）。回答については，「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「少し当てはまる」「非常に当てはまる」の５段階評定で回答を求めた。

⑥死に対する態度尺度

死に対する態度を測定するため，丹下（1999）の死に対する態度尺度 38 項目のうち，回答者の負担を考慮し，死に対する恐怖を測定する 11 項目，死の軽視を測定する６項目を内容がわかりにくい部分を一部修正し使用した。この尺度は「死に対する恐怖」「生を全うさせる意思」「人生に対して死がもつ意味」「死の軽視」「死後の存在への信念」「身体と精神の死」の６因子からなる。「死に対する恐怖」は，存在の消滅や死の未知性などへの恐怖を表す尺度で，“自分が消滅してしまうと思うと恐ろしい”など 11 項目からなる。高得点ほど死を恐れていることを表す（得点可能範囲：11 - 55）。「死の軽視」は，死を他人事や，苦痛からの解放とする見方の尺度で，“身近な人でない限り，誰が死んでも私には関係ない”など６項目からなる。高得点ほど死を軽視していることを表す（得点可能範囲 6 - 30）。回答については，青年期用多次元的共感性尺度と同様の５段階評定で回答を求めた。

３．結果と考察

（１）死別経験の有無と死に関する経験による人格的発達との関連

死別経験のあるものを「死別経験あり群」（n＝85），死別経験のないものを「死別経験なし群」（n＝17）とし，死別経験の群別に，死別経験による人格的発達尺度質問項目の合計点に関して t 検定を行った。その結果，死別経験あり群（平均 94.62，SD＝21.89）と，死別経験なし群（平均 94.94，SD＝25.21）との間に有意な差はみられなかった。この結果は，先行研究（渡邉・岡本，2005；坂口，2002；東村ら，2001）の結果とは相反するものである。しかし先行研究は，終末期を考える市民の会の会員や，ガンで近親者を亡くした家族を対象にした調査であり，平均年齢も高く，大学生を対象とした本研究とでは調査対象者に大きな違いがある。中高校生を対象とした丹下（2004a）の研究では，「死別経験をすること（もしくはしないこと）が特定の方向で死に対する態度の変化をもたらすとはいえなかった」と考察されており，さらに，大学生を対象とした研究（丹下，1995）においても，身近な人の死と死生観下位尺度との関連はみられていない。同じく大学生を対象とした前原（2006）の研究では，身近な人の死について，「実感がわかなかった」「信じられ

ない」といった記述が多くみられた。「死別という経験は，事故や自殺等の突然死を除けば，一瞬の出来事ではなく，死にゆくまでのプロセスすべてであり，長短の差はあるとしても死別相手の世話や看病の必要性が出てくる」と渡邉（2004）は述べているが、その「世話や看病」を大学生が担うことは少ない。「死にゆく者が親しい人に別れを言えずに，集中治療室で寂しく死んでゆかねばならない」（竹田，1997）という現実の下，大学生の多くが「死ぬ過程」をみることなく，ただ「死」という結果だけを突きつけられている。つまり，介護や看取りといった経験の伴わない死別経験は，その後の人生や生き方に大きな影響を与える出来事ではないと考えられる。

（２）死にまつわる情報で感動した経験と死に関する経験による人格的発達との関連

死にまつわる情報で感動した経験のあるものを「感動経験あり群」（n＝86），ないものを「感動経験なし群」（n＝16）とし，感動経験の群別に，死別経験による人格的発達尺度質問項目の合計得点に関して t 検定を行った。その結果，感動経験あり群（平均 98.45，SD＝21.47）が，感動経験なし群（平均 74.38，SD＝15.03）より有意に得点が高く（$t(27.84)=5.46$，$p<.001$），死にまつわる情報で感動した経験のある人の方が，経験のない人よりも人格的に発達していることがわかった（Table 1）。丹下（2004a）は「青年期以降は他の要因の影響―例えばメディアを通しての死の体験や，生や死に関する個人の思索など―が大きくなる」と考察し，死にまつわる情報が与える影響を認めている。前原（2006）の研究においても，テレビのドキュメンタリー番組によって「死ぬ間際の人間の生き方を初めて見た気がした」という回答がみられたように，大学生にとっては，結果のみを知らされた実感のない死別経験よりも，その人の生き様を丁寧に描いた死にまつわる情報の方が自分自身に取り込みやすく，成長の糧となりやすいと考えられる。

（３）死に関する経験による人格的発達の因子構造

死別経験による人格的発達尺度を作成した渡邉・岡本（2005）の研究は，調査対象者の平均年齢が62.92 歳と非常に高く，主に大学生を対象とした本研究においてはその因子構造，解釈が異なる可能性がある。そこで，青年期における死に関する経験による人格的発達の構造を明らかにするために，死別経験による人格的発達尺度質問項目 32 項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。なお，先行研究にならい，分析対象は死に関する経験による人格的発達との関連が示唆された，死にまつわる情報で感動した経験があるもの（N＝86）のみとした。

固有値の推移（14.78, 2.45, 2.01, 1.78, 1.29...）及び解釈可能性から３因子が妥当であると判断した。続いて因子数を３に固定し，再度同様の方法で因子分析を行なった。その結果，全ての因子に対して因子負荷量の高い（.35 以上）項目，また，いずれの因子に対しても因子負荷量の低い（.35 未満）項目が見られたため，その５項目を除き，残りの 27 項目で再度分析を行った。その結果，27 項目による３因子構造が得られた（Table 2）。なお，回転前の累積因子寄与率は 65.98%であった。

各因子の解釈及び命名は，それぞれの因子において高い負荷量を示した項目内容を検討し，渡邉・岡本（2005）を参考に行った。第Ⅰ因子では，“私は，他人の喜びを自分の喜びとすることができるようになった”“私は，自分中心ではなくなった”などの項目に高い負荷量が認められた。第Ⅰ因子はすべて，渡邉・岡本（2005）が「自己を受容した上で，他者，社会へと視点を移すという範囲の拡がりが認められるので『自己感覚の拡大』」と命名した因子の項目からなっている。そこで先行研究にならい，同じく「自己感覚の拡大」と命名した。第Ⅱ因子では，“私は，死ぬときになって人は完成するものだと思うようになった”“私は，身近な人の死についてよく考えるようになった”などの項目に高い負荷量が認められた。第Ⅱ因子は，自分自身の人生や，その終着点である死の意味について肯定的に考えるといった項目からなっており，「生と死の意味」と命名した。第Ⅲ因子では，“私は，死について考えることを避けるようになった”“私は，死は恐ろしいのであまり考えないようになった”などの項目に高い負荷量が認められた。第Ⅲ因子はすべて，渡邉・岡本（2005）が「死に対する恐怖が減少するという項目からなっているので『死への恐怖の克服』」と命名した因子の項目からなっている。そこで先行研究にならい，同じく「死への恐怖の克服」と命名した。各因子をもとに作成した下位尺度得点の α 係数は，「自己感覚の拡大」が $\alpha=.95$，「生と死の意味」が $\alpha=.89$，「死への恐怖の克服」が $\alpha=.82$ であり，いずれの下位尺度においても十分な内的整合性が認められた。

Table 1　死にまつわる情報で感動した経験の有無別にみた死別経験による人格的発達得点の平均値（n＝102）

感動した経験	平均値（SD）	t値（df）
あり（n＝86）	98.45（21.47）	5.46***
なし（n＝16）	74.38（15.03）	(27.84)

注）***p＜.001

「自己感覚の拡大」「死への恐怖の克服」については，渡邉・岡本（2005）の研究とほぼ一致する結果であったが，「生と死の意味」については大きな違いがみられた。その理由として，渡邉・岡本（2005）の命名した「自己感覚の拡大」下位尺度が幅広い意味を含んでいることが考えられる。渡邉・岡本（2005）の「自己感覚の拡大」下位尺度は，東村ら（2001）の研究において，①ライフスタイルの変化，③人間関係の再認識，⑤自己の成長に分類された項目や，坂口（2002）の研究において，①いのちの再確認，②自己の成長，③人間関係の再認識という別々の因子に分類された項目の内容を含んでおり，「自己感覚の拡大」は自己，他者，社会，そして生という内容を含んだ非常に幅広い下位尺度であるといえる。本研究では，その幅広い意味の中から，「生」に関する項目が別の因子として抽出されたと推測される。そして興味深いのは，その「生」に関する項目のみが新たな因子を構成したのではなく，「死」の意味を考えるといった内容の項目とともに「生と死の意味」因子を構成したことである。丹下（1995）は「生と死は対極的なものとしてとらえられているというよりはむしろ，心的に発達した人はその両方に対して肯定的な姿勢を持つようになる」と推測し，その後の研究（丹下，1999）において、「自我発達レベルの高い人や自己受容しているひとほど“生”と“死”両方を重く受け止め，かつ“死”を“生”との関わりという視点からとらえているといえる」と結論づけている。つまり，「生」と「死」は別次元の事柄ではなく，表裏一体の事柄であると考えられる。本研究の因子構造はそのことを表したものとなった。

また，渡邉・岡本（2005）の研究においては死別経験にのみ焦点を当てた尺度であったが，本研究では死にまつわる情報にも視点を広げている。よって本研究では以後，死に関する経験による人格的発達尺度と呼称する。

（3）死に関する経験による人格的発達と共感性・死に対する態度との関連

死に関する経験による人格的発達と共感性・死に対する態度との関連を明らかにするため，青年期用多次元的共感性尺度の4下位尺度，死に対する態度尺度の2下位尺度を独立変数，死に関する経験による人格的発達尺度の3下位尺度それぞれを従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った（Table 3）。

その結果，「共感的関心」については，「生と死の意味」に対して有意な正の影響が認められた（β＝.26，p＜.01）。すなわち，他者の状況や感情体験に対して自分も同じように感じ，同情などの他者志向の気持ちを持てる人ほど，死に関する経験後に「生」や「死」の意味を考えていた。「共感的関心」が高い人は，他者の「死」に出会ったとき，“死ぬなんてかわいそうだ”“どうしてあの人が死ななければならないのだろう”といった感情を持ちやすく，「生」や「死」の意味を考えるようになると予想される。しかし「共感的関心」は，相手の立場ではなく自分の立場から考え，“かわいそう”“なんとかしてあげたい”と同情的な他者志向の感情を持つことであるので，相手や社会に視点を移すといった「自己感覚の拡大」には影響を与えなかったと考えられる。

「ファンタジー」については，「自己感覚の拡大」「生と死の意味」「死への恐怖の克服」全てに対して影響は認められなかった。

「個人的苦痛」については「生と死の意味」に対して有意な負の影響が認められた（β＝－.21，p＜.05）。すなわち，他者の苦痛に対しても自分が不安になることなく，他者の状況に応じた行動がとれる人ほど，死に関する経験後に「生」や「死」の意味を考えていた。

「気持ちの想像」については，「自己感覚の拡大」「生と死の意味」に対して有意な正の影響が認められた（順にβ＝.45，p＜.001；β＝.31，p＜.001）。すなわち，相手の気持ちを想像できる人ほど，死に関する経験後，他者や社会に視点を向けることができるようになったと感じ，「生」や「死」の意味を考えていた。相手の気持ちが想像出来る人は，「死」

Table 2　死に関する経験による人格的発達項目の因子分析結果（プロマックス回転後のパターン行列）

No.	質問項目	M	SD	因子負荷量 因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	h^2
＜因子Ⅰ　自己感覚の拡大＞　α＝.95							
19.	私は、他人の喜びを自分の喜びとすることができるようになった	2.78	1.14	.95	−.04	−.06	.81
22.	私は、自分中心ではなくなった	2.50	1.04	.88	.02	−.11	.72
13.	私は、自分に対して肯定的になった	2.49	1.07	.87	.00	−.08	.69
24.	私は、他人の価値観を受け入れることができるようになった	2.99	1.20	.86	−.05	.02	.70
2.	私は、自分の中に好まない面をみつけたら、隠すよりも良くしていこうと思うようになった	2.90	1.10	.86	−.08	−.04	.63
4.	私は、他人の悲しみを自分の悲しみとすることができるようになった	2.98	1.27	.74	.06	.02	.62
18.	私は、忍耐強くなった	2.40	0.96	.71	−.02	.20	.65
32.	私は、考え方が柔軟になった	2.50	1.08	.70	.18	−.01	.67
12.	私は、つらいことや悲しいことを乗り越えていける強さをもった	2.58	1.14	.70	−.01	.07	.52
7.	私は、どのような人にもその人なりの良さがあると感じるようになった	3.26	1.27	.65	.16	.20	.77
14.	私は、人とのつながりを大切にするようになった	3.58	1.46	.61	.37	−.02	.78
8.	私は、自分本位の考えや行動をしなくなった	2.57	1.01	.58	.17	.10	.56
29.	私は、プラス思考で物事を考えられるようになった	2.50	1.16	.57	.22	.06	.57
9.	私は、ひとりひとりがかけがえのない存在だと思うようになった	3.70	1.41	.56	.32	.06	.69
26.	私は、ひとりひとりがかけがえのない存在だと思うようになった	3.53	1.40	.56	.27	.05	.62
＜因子Ⅱ　生と死の意味＞α＝.89							
31.	私は、死ぬときになって人は完成するものだと思うようになった	2.21	1.27	−.25	.97	−.13	.67
3.	私は、身近な人の死についてよく考えるようになった	3.77	1.16	.12	.76	.08	.76
25.	私は、死について考えることは人を成長させると思うようになった	3.48	1.24	.19	.64	.03	.61
20.	私は、死はその人の人生観が試されるときであると思うようになった	2.78	1.51	.22	.57	−.20	.45
30.	私は、人生とは何かわかるようになった	2.02	1.04	.10	.54	.09	.41
21.	私は、豊かな人生を送っていると思うようになった	2.94	1.27	.11	.53	.22	.51
5.	私は、以前とは違う新たな視点で今までの自分の生活を振り返ることができるようになった	3.40	1.17	.33	.49	.10	.63
16.	私は、一日一日を大切に生きようと思うようになった	3.63	1.27	.31	.45	−.04	.45
＜因子Ⅲ　死への恐怖の克服＞α＝.82							
6.	私は、死について考えることを避けるようになった*	4.20	0.97	.07	.01	−.88	.71
11.	私は、死は恐ろしいのであまり考えないようになった*	4.23	0.88	.10	−.03	−.87	.70
23.	私は、死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれを跳ねのけようとするようになった*	4.14	0.87	−.23	.14	−.66	.56
28.	私は、人が亡くなると、自分の死について考えさせられるのが嫌だと思うようになった*	4.10	0.85	−.07	−.05	−.47	.28
	因子間相関　因子Ⅱ			.62			
	因子Ⅲ			.47	.33		

注１）＊は逆転項目

注２）逆転項目は逆転させた後に算出した数値を示している

Table 3　死に関する経験による人格的発達各下位尺度を従属変数とした重回帰分析結果（n＝86）

		自己感覚の拡大		生と死の意味		死への恐怖の克服	
		β	r	β	r	β	r
共感性	共感的関心	.19	.59**	.26*	.53**	.13	−.28*
	ファンタジー	.01	.30**	.14	.45**	−.02	−.13
	個人的苦痛	−.16	.20	−.21*	.17	−.08	−.33**
	気持ちの想像	.45***	.65**	.31***	.54**	−.13	−.28*
死に対する態度	死に対する恐怖	.40***	.52**	.46***	.57**	−.43***	−49**
	死の軽視	−.07	−.32**	.10	−.16	.28*	.31**
	R^2	.66***		.58***		.33***	

注）***$p<.001$　**$p<.01$　*$p<.05$

を迎える人の気持ちを理解しようとし，自分の中に取り入れる過程の中で「生」や「死」の意味を考えるようになると予想される。「外的な事象として，直面することを余儀なくされた“死”を経験することによって受動的に死生観は形成されていくのみというのではなく，能動的にその問題を自己の内部で扱い吸収していこうとする動きのよって肯定的な死生観は形成されていく」（丹下，1995）と述べられているように，相手の気持ちを理解していこうとする姿勢が「死」の消化につながり，死に関する経験後のポジティブな変化へと結びつくのではないかと推測される。また，「共感的関心」とは異なり，自分の立場ではなく相手の立場から理解しようとする態度であるため，他者や社会に視点を移すといった「自己感覚の拡大」にも影響を与えたと考えられる。

「死に対する恐怖」については，「自己感覚の拡大」「生と死の意味」に対して有意な正の，「死への恐怖の克服」に対しては有意な負の影響が認められた（順に$\beta=.40$，$p<.001$；$\beta=.46$，$p<.001$；$\beta=-.43$，$p<.001$）。死を恐れていると，死に関する経験後に自己を受容した上で他者や社会に視点を向けることができるようになったり，生や死の意味を考えたり，といったポジティブな変化が起こることが示された。

「死の軽視」については，「死への恐怖の克服」に対して有意な正の影響が認められ（$\beta=.28$，$p<.05$），死を軽視していると「死への恐怖の克服」得点が高いことが示された。また，他のポジティブな変化との関連が認められた「死に対する恐怖」についても，死に対し恐怖を感じていないと「死への恐怖の克服」得点が高いことが判明している。つまりこれは，「死への恐怖の克服」下位尺度が，死に関する経験後のポジティブな変化を表す尺度とは呼べない可能性を示唆している。さらに「死への恐怖の克服」は，「人と人が互いに助け合い，支えあい，理解しあって気持ちよく社会生活を送るのに役立つ重要な特性」（登張，2003）である共感性の下位尺度と弱いながらも負の相関を示しており（共感的関心：$r=-.28$, $p<.05$，気持ちの想像：$r=-.28$，$p<.05$），このことからも，死に恐怖を感じなくなることが，その人にとってプラスに働く可能性は低いと考えられる。

自分の身に危険が迫ったとき，“怖い”“恐ろしい”と思わない人はいない。特に，生命の危機に対し人は非常に恐怖を感じる。これは生き物としての本能でもある。我々は遺伝子レベルで「死」を恐れているといっても過言ではない。「悲しいもの・寂しいもの・恐ろしいもの・汚いものといったイメージが死にはつきまとう」（竹田，1997）ともあるように，「死」と「恐怖」は一体となって我々に刻まれている。つまり，「死」に対し恐怖を感じていない人は，「死」ときちんと向き合っていないとも考えられる。丹下（2004b）の研究においても，死に関する深い思索経験のある人は死への恐怖が強い，という結果が示されており，「死」について真剣に考えれば考えるほど「死」の持つ恐怖の側面に気付き，「死」に対して恐怖を感じるようになると考えられる。「死」は恐ろしい，これは紛れもない事実である。我々が目指すべきは，その恐怖を抑えこみ忘れようと努めることではなく，自分の中にある恐怖を認めた上で，いつか必ず訪れるその恐ろしい「死」と向き合っていく姿勢なのではないだろうか。

4．引用文献

東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁　2001　死別経験による遺族の人間的成長　死の臨床, **24**, 69-74.

川守田千秋・風岡たま代　2002　看護学生の共感性と死に対する態度の関係―２年課程の学生を対象として―　神奈川県立衛生短期大学紀要, **35**, 15-21.

前原佳奈　2006　大学生における死に対する態度と自己受容・他者受容　宇都宮大学学校教育専攻卒業論文（未刊行）

坂口幸弘　2002　死別後の心理的プロセスにおける意味の役割―有益性発見に関する検討―　心理学研究, **73**, 275-280.

竹田純郎　1997　いま、なぜ死生学なのか―死生学の定義と課題―　竹田純郎・森秀樹（編）　＜死生学＞入門　ナカニシヤ出版　Pp.3-9.

丹下智香子　1995　死生観の展開　名古屋大学教育学部紀要(心理学科), **42**, 149-156.

丹下智香子　1999　青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討　心理学研究, **70**, 327-332.

丹下智香子　2004a　青年前期・中期における死に対する態度の変化　発達心理学研究, **15**, 65-76.

丹下智香子　2004b　宗教性と死に対する態度　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **51**, 35-49.

登張真稲　2003　青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討　発達心理学研究, **14**, 136-148.

渡邉照美　2004　死別経験者の死別に対する認知と関連要因の検討―ケア提供に着目して―　広島大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 411-420.

渡邉照美・岡本裕子　2005　死別体験による人格的発達とケア体験との関連　発達心理学研究, **16**, 247-256.